

分科会1「金目川水系が目指す里川らしさ（見守り隊からの提案含む）」

担当コーディネーター

藤野 裕弘

分科会1では3つの話題について話し合った。

1) 金目川中流域のアユの棲息実態数について報告があった。①弘法橋下では多数生息しているが、堰堤のためその上流には移動できず棲息していない、②南平橋から土屋橋の流域ではアユが確認できていないが、農薬、湧水の少なさなどの原因が疑われるものの調査は困難である、③飯島の堰では田植えの季節には川が干上がってしまうため成長できない、などの意見が参加者から出された。また、大雨でコケが無くなる、濁水が入る、魚道がない堰が多いことなどが、アユの生育を困難にしていることや、コンクリート護岸には魚が寄り付かないとの報告もあった。

2) 卒業研究で伊勢原市の湧水を調査した結果 23 か所確認され、H10年には60あった湧水のうち、半分の30か所は埋め立てられ、現在は23か所（うち12か所はしみ出す程度）しか残っていないと報告があった。将来が不安になる。また、秦野のように観光資源として評価されていないため、飲めるか否かの調査は行われていない。湧水はもっと他にもあるのではないかという意見が出された。

3) 卒業研究で親水公園の現状を調査した結果、親水公園と呼ばれる場所は多いが、親水性が薄く、利用者も少ないという報告があった。自然の川を公園の一部に取り入れたいくつかがよく利用されている。おおね公園も水の中で遊べるなど親水公園を意図していたが、葎が生え、刈取りが必要になり、期待したようにはなっていない。人工的に作った親水公園は、意図しないこと（生物の繁殖）が起こるなど課題が発生している。ほとんどは計画したような親水公園になかなかないことが明らかとなった。



図1. 話題提供（湧水調査&親水公園）の様子

最後に、里川は人の暮らしと川のかかわりを見ていくことであり、里川・里地里山・里海は一体のものとして守ることが必要であるとのまとめの言葉があった。その他、秦野市では水循環の視点からの取組みが始まった、川の水の質だけでなく量もテーマにしてほしい、伊勢原駅から鈴川の間は散歩が楽しめるコースもある、情報が利用できるようにもっと集まったらよい、などの意見が出された。



図2. 話題提供（アユの生息状況）の様子

分科会 2「金目川流域の生物の現状～金目川本流上流域～」

担当コーディネーター

・佐藤 泰基

(東海大学大学院 人間環境学研究科)

・田土 晴文 向井 謙三朗 田中 智仁 鈴木 陽介 高橋 花穂

(東海大学 教養学部人間環境学科自然環境課程)

【概要】

本分科会では、金目川上流域の生物の現状を調査し、現在問題となっているシカに焦点を当てた。シカによる被害としては、個体数の過剰増加による森林への被害（食圧）が挙げられている。シカの餌となる下草が不足し、樹皮を食すようになることで、土壌流出による保水力の低下やそれに伴う下流域での洪水被害が発生することを視野に入れ、シカの個体数のコントロールを行えないかという、学生の発表から議論を行った。

【分科会の流れ】

①学生による発表

本分科会では、里川づくりを行っていく上で、金目川の生物の現状を把握するために調査を行った。しかし、金目川水系は非常に広範囲であるため、金目川本流上流域の蓑毛にエリアを絞った。そこで調査を行う内に、5回行ったすべての調査でシカの足跡が発見されていることに気づき、さらに文献調査を行っていくとシカによる



食圧などの被害が多数報告されていたため、シカの個体数をコントロールしようと考えた。

そこで、広島にあるシカ牧場を参考にし、同じようなことができないか提案した。また、私たちの考えるシカ管理施設にオリジナル性を持たせるため、シカ肉を使ったレストランの併設やその他加工品の提案も行った。

ディスカッションの内容としては、まずシカの管理施設の提案をどのように感じたか率直な意見を頂いた上で、シカの管理施設は実現可能か、他にどのような提案が挙げられるかを話し合った。

②当日行われた議論について

今回の議論で、我々のシカ管理施設の提案についてディスカッションを行った結果、これからのシカ対策について様々な提案や意見、現在のシカの問題などが挙げられた。

まず、シカの管理施設をどのように思うかという質問に対して、シカの有効利用の仕方(漢方、食肉)など専門的に調べているところをもっと調査したほうが良いという意見

や、くずはの家周辺でシカが増殖しているらしく、市街地への被害も問題になっているとの意見が出た。

また、二頭のシカがどれだけ子どもを産むのか、それによって管理頭数が変わり施設の大きさや求める人材も変わってくるため、考えたほうが良いという意見も出されるなか、現代の若い世代やこれからの子供たちへの環境教育を優先すべきだという意見も出た。

シカの管理施設以外での提案としては、シカは群れで行動するため、シカが多く存在する地域を丸々囲ったほうが良いのではないかと、広い牧場をつくるよりも山ごと柵で囲ったほうが現実的であるとの提案が出た。

【まとめ】

私たちのシカ管理施設の提案は、少子高齢化、ハンターの不足、若い世代への環境教育不足などの理由から人材の確保が難しく、また、施設建設の上で広大な敷地面積を必要とするため、難しい提案だとの意見が多数挙げられた。そのため、現代の若い世代への環境教育を行うことと、管理施設ではなく山ごと柵で囲うほうが現実的であるとの意見が多く寄せられ、最終的には、里山と里川を連動する運動を若い人達(大学生など)に考えて欲しいという意見でまとまった。



分科会3 「祭りが与える影響～里川と地域活性化～」

○担当コーディネーター

菊池 章仁

(東海大学大学院 人間環境学研究科)

荒木ひかり 上村貴昭 前田耕佑 鶴田怜志

(東海大学 教養学部人間環境学科自然環境課程)

【概要】

多くの学生は金目川水系流域外から集まっており、そのような学生たちが持つ「里川」に対するイメージは「人と親しみのある川」「川と人の親しみの場」であった。学生たちは「川と人をつなげるためにはどうしたら良いか」と考え、「祭り」に着目して金目川の「里川づくり」を考察した。そこで、「祭り」が地域に与える効果および流域内で行われている既存の祭りを各自調査し、里川に繋がる要素や催し物を抽出すると共に、祭りに加える新たな要素の提案を行った。

【分科会の流れ】

① 学生による発表

学生たちは文献調査の結果から、祭りは「協働作業の充実と伝統文化の体感によって、地域的繋がり形成」に寄与するとし、祭りが地域に与える効果が里川とどのように関係するかという点においては、「多くの人が参加することに加え、地元への愛着・関心が育まれる要素を含むことから、地域活性化ならびに川への愛着・関心が得られるのではないかと」考察し、祭りと里川の繋がりを発表した。

- ・各団体との連携による世代間の交流と、安全性の確保（大学、行政、NPO、シルバー会等）
- ・体験型のイベントの重要性
- ・川の文化の体験（投網、草花遊び、釣り、生物観察、その他川遊びの疑似体験）
- ・スタッフ側の保険への加入（体験型の催しの増加・促進）
- ・若者が関心を持つイベント（スカイランタン、チューブボート、BBQマナー講座等）
- ・集客を目的としたイベントにも、川の保全意識を高める工夫を加える
- ・規模が大きい祭りへのブース参加
- ・学校を巻き込んだイベント

続いて、流域内（秦野市、伊勢原市、平塚市）で行われているいくつかの祭りに対して各自

図1. 里川に繋がる要素の一部

で文献調査および聞き取り調査を行った結果について、祭りの内容・規模・運営面を中心に説明を行った。また、調査した祭りの中で里川に繋がる要素を考察（図1）し、里川に繋がる新たな催しとして、川の保全を意識する工夫を加えたスカイランタンや、各種露店と川に関する体験活動を組み合わせたイベントの提案を行った。

② 意見交換

意見交換会では、(1) 里川において地域活性化はどんな意味があるか、(2) 3市の祭りに里川づくりをどう取り入れるか、の2点を中心に行った(図2)。

下の表1は、得られた意見をまとめたもの。



図2. 意見交換の様子

(1) 里川における地域活性化について	(2) 祭りと里川について
<ul style="list-style-type: none"> ・地域活性化は意味がある ・金目観音橋は歴史ある橋。どうにかして活かしたい。 ・山に興味がある人、川に興味がある人、様々な人が地域に集まる(川に集まる)ことで、活性化する。 ・現在の学校やオフィスは、掃除を専門の人がやる場所が増えており、自分達でどうにかしようという気持ちが薄れる。こういった気持ちを変える必要がある。 ・川は最大の学習の場。河川内の草や石は残す必要がある。 ・環境に対してもそうだが、地域の生活(大雨、洪水等の対策)という視点も里川には必要。 ・環境は人間の生活になくってはならないものであり、これを全員が理解する必要がある。 ・関心・愛着を持つことは地域活性化にも里川にもつながる。 ・地域活性化に反対する人を、どう納得させるかが問題になる。 ・ある団体は、近くの小学校へ訪問もしている。 ・地域に対し、祭りに対し熱い心を持つことが大事。 ・市から何か投げかけるより、地域の方から市と連携しようとする動きそのものが、祭りを成功させる近道ではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域を盛り上げるために観音橋、前河原橋で盆踊りをしたら良いのではないかと。→金目地区全てを対象に呼び込み、個々の祭りとも連携を行えばよい。 ・流域では自治会それぞれで行事を行っている。この行事に里川をどう繋げるかが問題。 ・あじさい祭りは参考になるのでは? ・新たに祭りを考えるとして、安全性、場所、盛り上げ方などの問題を解決する必要がある。 ・祭りの中にブースとして展示し、それをきっかけに興味・関心を持たせる。 ・新しいイベントを考えるのは課題が多いため、まずは既存の祭りに入れ込む形から発展するのはどうか ・川で行う祭りの目的には、高度経済成長期に汚れた川をどうにかしたいという気持ちもあった。 ・灯籠流しなどは、里川と祭りが上手くいく例では。 ・川の祭りは歴史的背景と繋げるものが多い。金目川はどうか?→徳川家康が関わった歴史や、観音橋を活かせる。金目川の歴史をアピールする祭りが欲しい! ・祭りによって、地域の多くの人に感心を持ってもらう。→大事に思ってもらう事こそが大事。 ・自然に神様がいる、という意識が祭りの起源。これを復活させられれば、川にゴミを捨てたり、汚したりしなくなるのではないかと。
(3) 自由意見	
<ul style="list-style-type: none"> ・(学生に対して)川でどんな遊びを知っているか、遊んだことがあるか。→(学生の回答)都市部出身の学生はそもそも川の良さを知らない。金目川での体験活動を通して、素晴らしさに触れた。 ・体験活動は、大学生や大人にも効果がある。祭りに体験を取り入れる意義はある。 ・農業には、川を利用する、川を汚す、という2つの側面がある。農業をやる人はこれを理解する必要がある。 	

【まとめ】

意見交換では表1の通り、非常に多くの意見が得られた。また、学生だけでなく地域の人同士で話し合うことで新たな可能性が見えた、面白い案が多くて楽しめた、等の好意的な感想が参加者と学生両者から得られた。参加者の中には、地域で祭りを実施することを長年夢見ていた、温めていた祭りの案を学生と意見交換できて嬉しい、という方もいた。

今回の学生発表および地域の方との意見交換を通して、川への愛着・関心を育む“祭り”というキーワードが、里川づくりへの一つのアプローチとなることが示唆された。

分科会4 「金目川水系における地域コミュニティ醸成～親水性を高めるためには～」

○担当コーディネーター

椿 剛史

(東海大学大学院 人間環境学研究科)

望月 嘉人 川出 汐織 染谷 侑

(東海大学 教養学部人間環境学科自然環境課程)

【概要】

「里川づくり」においては、多くの市民の参加・協力が必要であり、興味・関心を生み出す活動と交流する場が重要であると考えた。そこで、地域コミュニティに着目し、地域における人との交流が希薄化している現状を踏まえ、河川をフィールドとした“楽しく”・“人がたくさん集まる”イベントを学生が各自考案し、提案をした。発表後、参加者とともに金目川水系における地域コミュニティおよび親水性について意見交換を行った。

【分科会の流れ】

① 学生による発表

学生からはテーマに対し、「KANAME RIVER×COMMUNICATION Project」と題したイベントプログラムを提案した。プログラムに含まれている「グレートアップストリーム」・「キャンプ」・「物産展」という3つの企画を3名の学生が説明した。

「グレートアップストリーム」は、下流から上流に向かって歩くスポーツであり、ファミリーの部や一般の部と設け、様々な世代が楽しめるような工夫を発表した。

「“つながる”物産展」は、秦野市・平塚市・伊勢原市にある特産物の紹介・販売を戸川公園の水無川で行なうイベントで4つの部門やイベントを通して流域間の多様な人の関わりが得られる内容を発表した。

「おつかレー！川を全身で感じる！！リバーキャンプ」は、「カレー作り」・「アクリルたわし作り」・「灯籠流し」・「ワークショップ」の4つのメインイベントの説明を通し、より深い思い出を残せることを発表した。

これらのプログラムを実施することにより、川をフィールドにした交流の場や体験活動



イベント目的

- ・ 里川づくり
身近な川をフィールドに、人に親まれる川となることを目指し、持続的な里川として保全を行うことができる地域環境や地域住民の育成
- ・ 地域コミュニティの形成
地域間での交流が希薄化してきている現状を踏まえて、持続的な交流の起点をつくるための“楽しく”、“人がたくさん集まる”イベントにする

学生が作成した資料・スライド (一部)

を通じて、川への関心を持たせるとともに、家族あるいは地域の方々との“つながり”を生み出す1つのきっかけになるのではないかと考えを伝えた。

② 当日行なわれた意見交換

意見交換では、「学生の提案を受けて、“人と川”、“人と人”との関わりを増やすにはどうしたら良いと思いますか？（親水性を高めるには？）」というテーマで行った。

学生の提案に対しては、若者らしい提案とのコメントを頂いた。また、提案の改善点としては川から眺める風景を活かすこと、子どもや地域の人たちがどのような遊びや活動に関わる



分科会の様子

のか、その人数や規模を把握し、流域における団体と連携して行なうことが望ましいとの意見が挙げられた。

子どもの遊びに関しては、川原の石に絵を描く「ストーンペインティング」や捕まえた魚を水槽に入れて行なう「即席水族館」など、活動のアイデアが参加者から出た。

親水性に関しては川が「普段当たり前であって、当たり前に入れる場」であることが重要だとの意見が多く出た。かつては、小学校の授業や川に入ることや水場としての利用等で川が身近な存在であったとのことだった。

今後、親水性を高めていくには川をフィールドに好きなことを通して“つながり”を生み出し、継続していくことが望ましいということが挙げられた。また、大学生が川を好きになり、熱意を持って活動することで、多様な人を動かしていけるとのコメントを頂いた。

【まとめ】

分科会において、金目川水系では以前に比べて川に対して親しみやつながりがみられなくなったことが意見として出た。川を身近な存在とするためには、小さなことを地道に行い、コミュニケーションを図っていくことが重要であるという確認をした。

発表や意見交換から「川の魅力」や「地域らしさ」を見つけ、人が楽しいと感じる活動を行い、川への関心を生み出し、継続していくことが金目川水系における里川づくりにつながるのではないだろうか。